文字もじ MOJI の世界

40．欧文書体の活字アーカイブ

木谷正人＊

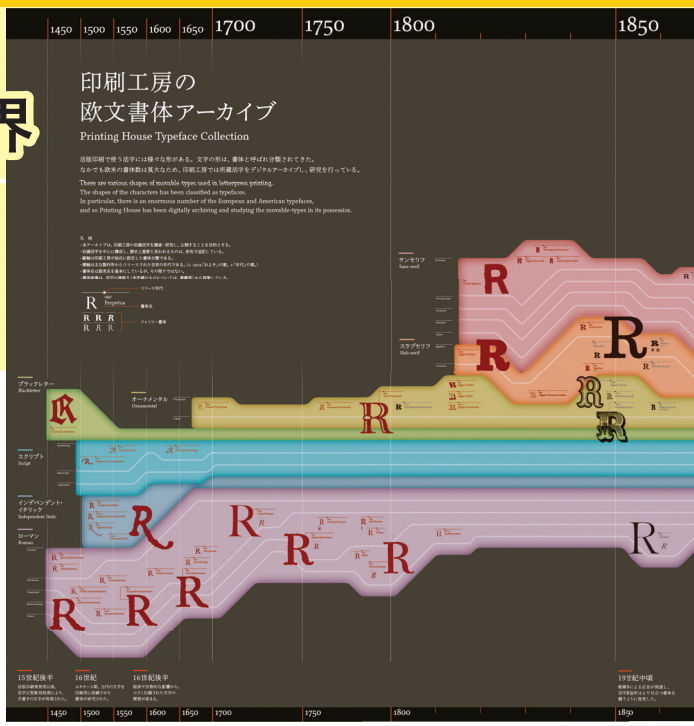


図１　大型体系展示パネル（2006×6590mm）

皆さんは欧文書体でよく使用する書体やお気に入り書体があるだろうか？ また，その書体はいつ誰が，どのようにして創り，どこで生まれたのか，そしてどんなところでよく使用されているのかご存知だろうか？ 有名な書体デザイナーのアドリアン・フルティガーは「書体はワインに似ている。結局は同じものを選んでしまう。」と言っていた。私も，学生時代にエリック・ギルという芸術家（彫刻家）のギルサンという書体に出会い，それ以来，書体や作家に興味を持ち，使う書体はいつもこの作家の書体だったことを思い出す（今もだが…）。

さて，今回のテーマである「欧文書体の活字アーカイブ」も博物館に来ていただける多くのお客様が書体に興味を持ってもらえれば…という思いからスタートしたのである。

アーカイブ構築の目的

私が勤務する印刷博物館は開館から 2020 年で 20 年の節目を迎え，新たに 2020 年 10 月にリニューアルスタートを切ることとなった[1)]。今回のテーマである「欧文書体の活字アーカイブ」もこれに合わせ，博物館で収集してきた多くの収蔵活字を来館された多くの方々に知っていただき，書体というものを楽しく学んでいただこうという目的で展示構成されたものである。そしてもう一つ，重要な目的がある。

それは，博物館内で活字を使ったワークショップや研究を行う上で，その資産である多くの欧文活字を有効に管理・運用できるようにすることである。

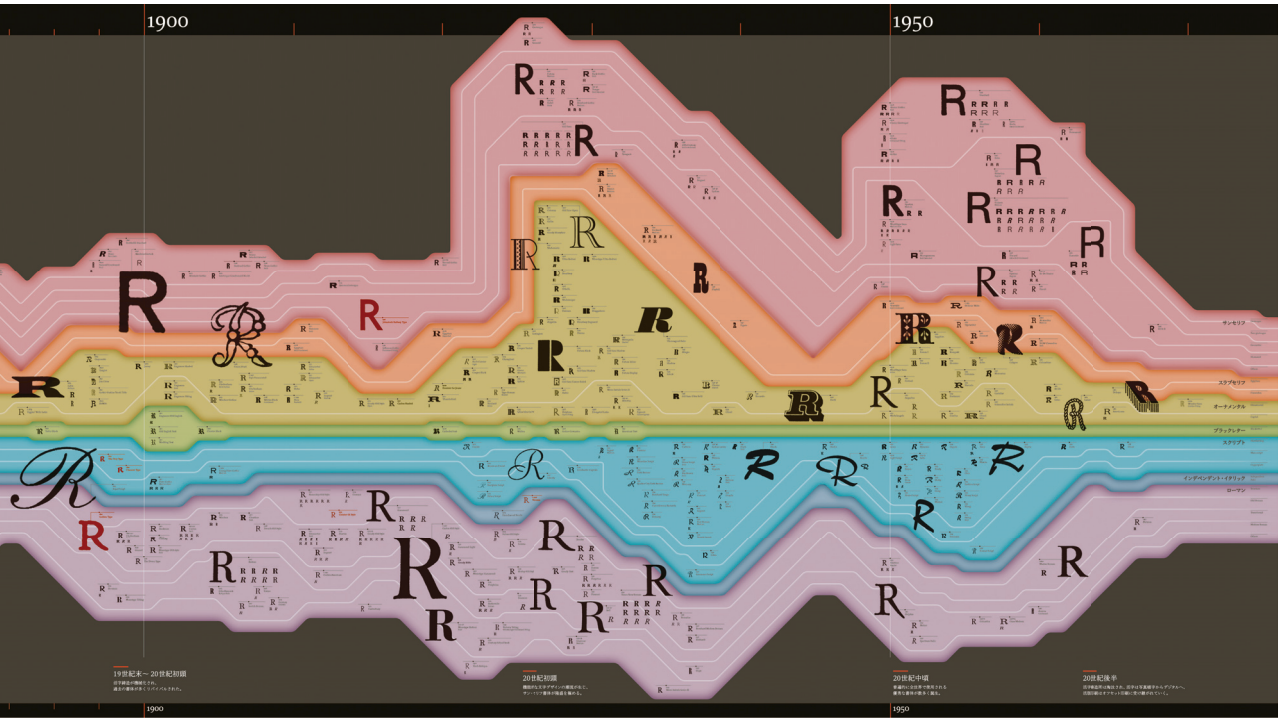
現在，博物館で収蔵する欧文活字は約 650 書体以上でその活字を製造した鋳造所が約 60 社，そのサイズバリエーションを加えると，3300 種以上にもなる。この活字を本数に単純計算すると少なくとも 1000 万個以上の活字が存在することになる。さらに，これ以外に欧文の花形装飾活字や木活字が 300 種以上ある（これらに和文活字は含んでいないことをお断りしておく）。

現代のデジタル書体と違い，活字は鉛合金の物質として存在するのであるが，これだけの活字を保存・運用するのにどれだけのスペースと環境が必要か，また，それがいかに困難か……そう，まさに今回のアーカイブは，この困難を解決することにも大きな意味があった。

なぜ，いま活字の展示？

私が担当する印刷工房は，活版印刷に使用され

1）2020 年 12 月初旬現在，印刷博物館は新型コロナウイルス感染予防及び拡散防止ため，Web からの事前予約制です。https://www.printing-museum.org/



る活字・機材の保存，研究活動に加え，一般のお客様に，活版印刷を当時の手法で実際に活字を拾い，組版をして，印刷まで体験できるワークショップとしても運営している。まさに知る（学ぶ），体感する（感じる）を大きなテーマとし，活字や活版印刷を次世代へ伝える役目も担っている。

活字はコミュニケーション手段として，それぞれの目的のために作られ，時代の考えやイメージ，情報を伝えるために新しい命を植えつけられ，現代に形を変えて生き続けている。いま改めて，いや今だからこそ，日ごろ何気なく使用している書体の背景にあるものを感じ，新たな道理を見い出す「温故知新」という考え方が必要なのではないか。今回の展示・アーカイブの構築にもそんな想いが込められている。

設計・アーカイブ化

欧文書体のアーカイブの制作にあたり，収蔵している活字に偏りもあるが，まず書体分類の策定や名称･人名･鋳造所（カタカナ表記）の統一等々，博物館独自の基準づくりを始めた。そして文献による調査裏付けを行い，データベースへの入力を開始。収蔵活字の製造年までは追跡できないので，そのリリース年（発売年）を製造年とした。

書体画像はあくまでも活字で刷られた印刷物を使用することにこだわり，書体清刷りを用意し，スキャニングして画像データとして登録。小さなポイントしか収蔵していない活字もあり，実際の書体画像がデジタル書体のようにシャープではないのはそれが要因である。

また，引用文献の使用許諾，各書体の解説文の作成，影響関係の調査・各活字の保管場所等々，約 1 年間はパソコンと向き合う日々となった。そんな矢先，私たちはコロナ渦における自宅でのテレワークを余儀なくされる。幸か不幸か，開館予定が 10 月に延長され，この時間がデータベースへの入力作業に充てられたことは逆に恩恵となったとポジティブに考えたい。

展示企画

そしていよいよ，展示・ビジュアル企画を行う。

展示スペースは約横 6m× 天地 3m の壁周辺スペースをどのように表現していくか？

まず，壁に 6m×2m の大型体系グラフィック

パネルを設置。その前に，それを補足，解説する電子デバイス（機器），そして活字等のリアルな現物展示という大きな骨子を確定させた。

ここからは制作ストーリーに合わせて展示内容をご紹介したい。

大型体系グラフィックパネル

体系といっても当初はスタイル別，鋳造所（国）別やデザイナー別，等のいろいろな切り口が候補として上がった。その中で今回は収蔵活字の「かたち」をテーマに時代ごとに配置する案で決定。アーカイブからプログラムを通し，吐き出したデータを InDesign で処理し，細かいところは手調整となる。もちろん 15 世紀からのオリジナル初出書体は博物館が所有しているわけではなく，どうしても「かたち」の派生を語る上で欠かせない書体をピックアップして未所蔵活字としてデータ化し，登録。パネルには未所蔵活字を赤文字で，また，収蔵している活字は黒文字で表記することにした。「R」という直線と円弧を併せ持つ文字をシンボライズ化し，重要度に合わせて 3 つのサイズバリエーションを設定して表現にリズムをつけた。

実際に時間軸で書体を配置すると，偶然，いや必然なのだろう，15 世紀に出現する活字は製作者ごとのアイデンティティーを持って生まれ，16 世紀から世界へ広がり，育まれていくのがよくわかる。年表の 19 世紀は産業革命の急速な機械化の変化を体現し，多くの活字書体が密集することで黄金期ともいえるエネルギーを感じることもできる。（図 1）

また，大戦前後は活字がほとんど出現しなくなるなど，時代ごとに現れる面白い波形から新しい発見がある。来館した際には独自の視点で楽しんでいただきたい。

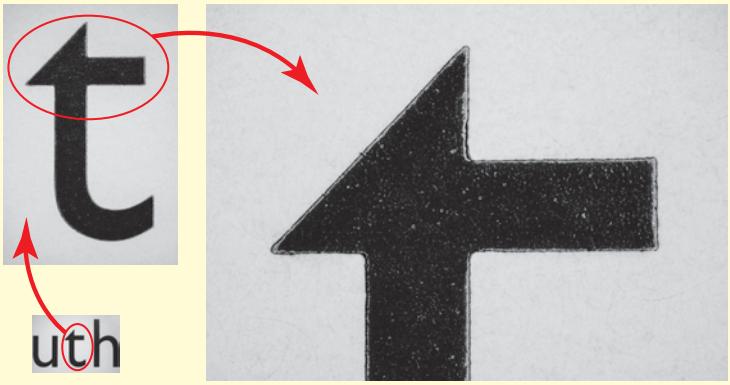
操作・検索表示画面

電子デバイスはサーバーとして Mac Mini を，操作・検索表示画面を iPad で構成。もちろん iPad では大型パネルに配置された文字の見づらい部分を補足し，書体を確認できるようにすることも大きなテーマである。それにはパネルに配置された座標軸をデータ上でそれぞれの書体に持たせ，パネル画像の上で点滅表示させて解説を連動できるように対応した。もちろん違った切り口で鋳造所別，デザイナー別等々の検索軸を設定して書体を探せるようにもしている [2)]。

一般の方やお子様向けには同じ文字を探すこと

Column

工房の活版ワークショップを体験されたお客様がご自身で刷られた印刷物を見て，「きれい」とか「力強い」よく言われるが，活版印刷がどうしてきれいに見えるか皆さんはご存知だろうか？印刷関係者の方には釈迦に説法で申し訳ないが，私はその理由を活版印刷にはマージナルゾーンがあるためと説明している。（もちろん，インキや紙も影響するのだが…）



マージナルゾーン：凸版印刷の大きな特徴で，印刷した活字・画像や点のふち（縁）に生じる隈取り（インキの濃い輪郭）のこと。版の山（凸）部分に着いたインキを紙に転写させるときに，中央部分のインキが圧力によって押し出されるため，画像部分の周りにインキのはみ出しが起き，かつ，その内側にインキの不足のところが生じるので，画像部分の周りにインキの濃い輪郭ができる。このようにしてできるマージナルゾーンが一般にシャープな印象を与える一因となっていると考えられている。

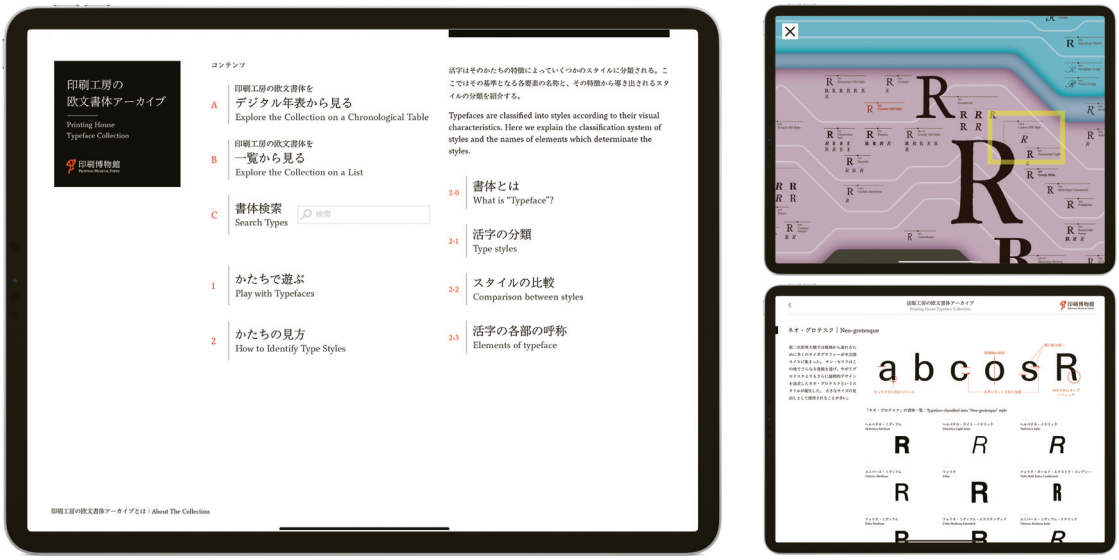


図 2　iPad Pro 12.9inch。左：コンテンツ，右上：パネル連動表示，右下：書体解説

で楽しみながら書体を理解してもらう「かたちで遊ぶ」というコンテンツも用意。ローマンやサンセリフ書体で初級編から上級編まで，時間を表示し，ゲーム感覚で書体を探してもらうようにした。お勉強モードのコンテンツ「かたちの見方」では改めて，書体とは？フォントとは？シリーズとは？ファミリーとは？のいつも使っているがあいまいな用語解説や活字部位の名称，書体の分類等も紹介している。(図 2)

展示

ここでは今では見ることも少なくなった実際の活字とその印刷物を見ていただくことを主眼に置いた。まずは印刷技術発明以前，14 ～ 15 世紀頃に手書きされた「筆写譜」，それと連動してグーテンベルクの活字（レプリカ）とその清刷り。それに今日のローマン体の源流といってもさしつかえないニコラ・ジェンソンによる 15 世紀後半のヴェネチアンスタイルのローマン体活字で刷られた零葉 (オリジナル・インキュナブラからの 1 葉のみ) を展示。(図 3)

次のケースではスタイルごとの様々な「かたち」，サイズの代表活字組版と，その版で印刷した刷本を宝石のショーケースのように展示した。ただしこれらの活字は置きものではなく，いつでも印刷できる状態で動態保存された活字の一部である。

2）2020 年 12 月初旬現在，iPad はコンテンツのダイジェストを自動再生表示しており，残念ながら自由に操作していただけない状況です。あらかじめご了承ください。

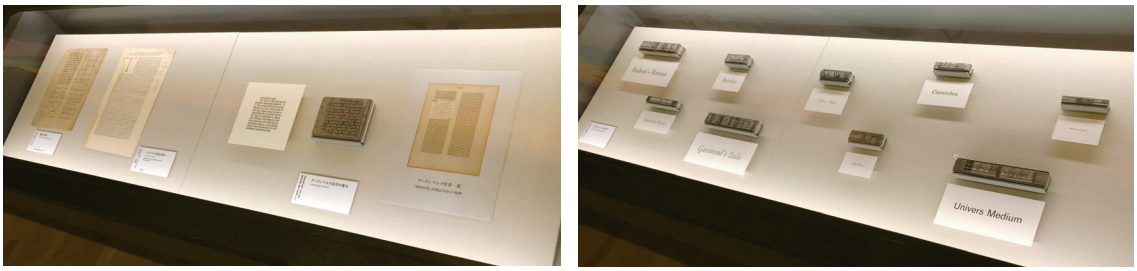


図 3　「筆写譜」，「ニコラ・ジェンソン零葉」，「グーテンベルク活字組版・清刷り」展示 (左)。活字組版・清刷り展示

これから…のアーカイブは？

この活字アーカイブはまだスタートしたばかり。現在データを活かした書体のビジュアル表現にもチャレンジ中で，特に「書体の派生」については各書体のかたちの変遷をタッチしながらフォルムを比較して見ることで，感覚的に書体というものを理解してもらえるように，試行錯誤している。(図 4)

その他，鋳造所やデザイナー解説の充実やその体系づくり，多言語化，未着手の装飾活字や木活字のアーカイブ化等々，多くのコンテンツを充実させていく予定である。また現在，このアーカイブの閲覧は博物館内のクローズドな環境だけでの利用としているが，将来的にはオープンな環境で多くの方々にご利用いただけるよう，より進化させていきたい。

書体のファンに

スタイル（建築・ファッション・絵画…等々）とはその時代精神・嗜好に機能的で表現的なフォルムを適合させたもの。このような観点からいえば，絶えず変わっていく書体の発展もまた，その時代や文化・政治・技術等を反映して生まれてきたものだといえる。時代背景とともに俯瞰してみ

＊ KITANI, Masato
凸版印刷株式会社　印刷博物館
印刷工房 インストラクター・研究員
〒112-8531 東京都文京区水道 1-3-3
masato.kitani@printing-museum.org

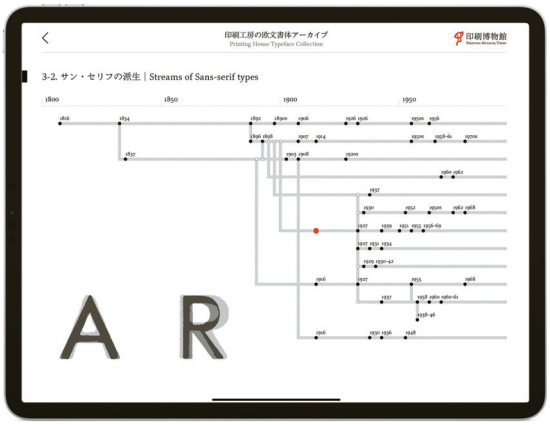
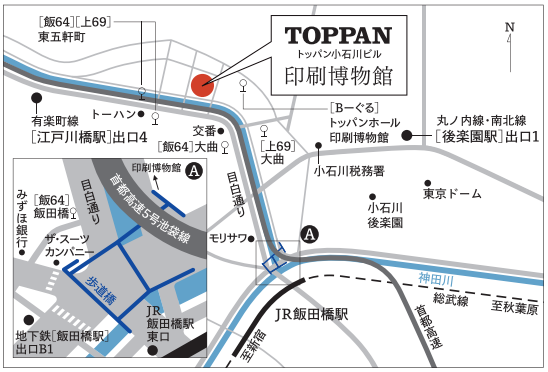


図 4　iPad「書体の派生」試作

ると，いろいろな面白いものが見えてくる。一つひとつの活字に生まれてきた理由がある。私は書体のその背景を知ることで，その書体との向き合い方，使い方が改めて理解できるのではないかと考える。

来場したお客様の中から，この展示を見て，書体の生まれた時代や背景にまで興味を持っていただけるようなファンが一人でも多く生まれたらありがたい。皆様には是非ご来館いただき，アドバイスや忌憚のないご意見を頂戴したい。

なお，最後となったが，この欧文書体アーカイブ展示を構築する上で，リニューアル総合デザイン監修の中野豪雄さん，大型パネルは谷田幸さん，iPad コンテンツは太田暁雄さんに，アーカイブ体系や解説文には白井敬尚さん，また，工房スタッフに多大なるご協力をいただいた。紙面を借りてお礼を申し上げたい。■